

古代日本の暦に就て (6)

S . I 生

前號述べた魏志倭人傳に載せて居る魏略の記事によると、我國の上代に於ては、“其俗正歳四時を知らず”とあるけれども、春・秋と云ふ季節を示す言葉は僅かではあるが、記紀神代の卷にも見出すことが出来る。又、夏と冬の季節を示す言葉も、神の御名として同じく記紀に見えて居る。即ち、古事記神代の卷には、夏高津日神と申す御名があるが、夫れは、夏には日の空を行く道が高くして、長く日が出て居ると云ふ意味である。冬は、古事記に天冬衣神の御名があり、舊事紀にも素盞男尊の御孫に、冬年神と云ふ御名が出て居る。

後世の人は、上代に於ける四季の和名の意味を解釋せんと、色々と研究し、自説を發表して居るが、何れも區々であつて、一致して居ない。

然し、春は、草木の芽が張り出る意であつて、張と云ふ字に當ると云ふ。之れは、大體、定説となつて居る。此のことは、次の二首の歌によつても、容易に推定出来るのである。書紀に、春は則ち重播種子とあるのを思ひ合せると、興味深い。

霞立ち木の芽もはるの雪降れば

花なき里も花ぞ散りける

紀貫之 (古今和歌集卷一)

山代の久世の鷲坂神代より

春ははりつゝ秋はちりけり

(萬葉集卷九)

秋は、飽であつて、穀物が成熟し、之れを食して、飽きる程豊かな季節と云ふ意味となる。夏と冬は、氣候の寒暖を表はして居ると解するのが通説であつて、夏は熱の轉義で、冬は冷の轉化であると云ふ。猶、四季の和名については、尾代弘賢の古今要覽考卷第二十七を参照せられることを希望する。以上、述べたところで、大體神代に於ても、四季は判つて居たものと推定出来るのである。

神代では、月の記載が全く無いが、月讀尊の御名は特に注意すべきことを、筆者は述べた。月讀尊の御名は古事記には『月讀命』として載つて居るが、日本書紀には『一書に云く月弓尊、月夜見尊、月讀尊』と、三通りの御名が記されてある。舊事紀には『月讀尊、亦是月夜見亦月弓と云ふ』とある。月弓尊の「ユミ」は「夜見」の轉化であるが、月夜見尊の夜見と云ふ文字は月が夜見えるから「月、夜に見える」と云ふ意味になると解する説と、月夜見の夜は夜の意では無く、月のことであつて、萬葉集にも月讀の光、月讀壯士、又、月夜見乃持有越水などあるのを見ても判ると云ふ説もある。然し、筆者は、上の三つの

御名の内、月讀尊は、古事記、日本書紀、舊事紀を通じて載つて居る神の御名であるから、之を採用することゝし度い。そして、月讀の“讀む”と云ふ字は、數へると云ふ意味で、月の盈虚の形によつて、夜を數へると云ふ意味と解釋することが適當と信するのである。即ち、月立、望、晦の月の位相を見ては、夜々の數を知る便りと爲したのである。

元來、『曆』と云ふ言葉も、^{かよみ}日を讀む即ち日讀から轉化した語であつて、即ち日を數へることであると解釋するのが通説である。

月讀の解釋を裏書きする興味ある歌が、萬葉集に載つて居るから、次に引用することゝする。

ぬばたまの夜わたる月を幾夜經と
數みつつ妹は我待つらむぞ

此歌は、萬葉の歌人の中でも自然を詠んで繊細幽寂なる歌風のあつたと云ふあの^{わかち}大伴家持の作つたもので、萬葉集卷十八に見えて居る。そして此の歌を讀んだのは天平二十年（皇紀1408）のことであつた。又、湯原王の歌に、次の如き作がある。

天に坐す月讀壯子幣は爲む
今夜の長さ五百夜繼ぎこそ

之の歌は天平五年（皇紀1393）に詠まれたのである。

さて、上代に於て月を毎夜數へたとすれば、當然に一月、二月、の觀念が生じて來ると解することは極めて自然であらう。嚮に、本居宣長が一年を十二月に分けて、「むつき」、「きさらぎ」等月々の名をつけたのは、多分、仁德天皇（皇紀973—1059）頃からであらうと云つたことを述べたが、筆者は、もつと以前から、多分神代の頃から、少くとも、神武天皇御東征の頃以來、月の和名は存在して居たものと思ふ。

日本書紀神代の卷に、『^き晝は五月^{はへ}蠅なす』と云ふことが出て居るが、之は夏の蠅の様にうるさいと云ふ意である。古事記には狹蠅と書いて居る。日本書紀が養老4年（1380年）に編纂せられた時に、當時の言葉と文字とで書かれたと考へられぬこともないが、兎に角神代の記事に、五月と云ふ文字が見えて居るのである。

又、出雲風土記の、出雲國造神賀詞にも、『晝は五月蠅なす』と云ふ言葉が出て居る。

大嘗祭に、中臣氏が宣る天神壽詞は、餘程古く神代以來のものと云はれて居るが、此の中に、『十一月^{しもつき}中の卯の日に』と云ふことが載せられてある。

古事記、中卷、神功皇后の條に、『四月^{うづき}の^{つきたち}上旬』と云ふことが出て居る。時は

皇后御攝政元年(皇紀861)のことである。

斯んな風に、十二月の和名も、其の起源は餘程以前に遡り得られるのであつて、日本書紀、神武天皇紀に、『是年なり。太歲甲寅。其年十月丁巳朔辛酉』と

十二月和名文獻一覽表

四季	春			夏			秋			冬		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
和名	むつき	きさらぎ	やよひ	うつき	さつき	みなつき	ふつき	はつき	なかつき	かみなつき	しもつき	しはす
古事記	一	序炎	一	神功皇后ノ條	一	一	一	一	一	一	一	一
日本書紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神代卷五月經神武天皇紀	神武天皇紀	孝昭天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀	神武天皇紀
萬葉集	第五	第一	第一	第十六	第三十五	第三十八	第十	第一	第八	第十二	第三	第八
大永五年本 頃爲明曆	親	衣更月	彌生	疏花月	早苗月	穀皆盡	書披月	葉落月	夜長月	霜降月	霜降月	師馳月
易林本 節用集	臨	衣更着月	彌生	卯月	早	皆水無月	ふつき文	一	長月	陽月	一	一
賀茂真淵 (古事記傳)							ふつき文	ははら	いなかり			
本居宣長 古事記傳			彌生				彌含月	彌含月	彌含月			
谷川士清 倭訓栞	親生	氣更來	彌生	卯花月	幸小苗月	水月	彌見月	葉月	長夜長月	神嘗月	霜月	はつ歳極る意
筆者說	生	氣更來	彌生	植	早苗月	水月	彌見月	張	彌見月	神嘗月	霜月	はつ歳極る意

して、十月の和名が訓せられて居ることは、不思議ではない。太歳とは木星の神靈の異稱であつて、又、太陰とも云ふ架空の星のことであるが、文那では此の太歳、云ひ換へれば、木星の所在によつて歳次を示したのであつて、日本書紀には天皇の御代御代の始めに此の太歳なる文字が記載せられてある。易緯乾鑿度なる書には『常に太歳を以て歳を紀す』と載つて居る。

序でに、十二月の和名を載せて、其の語源を研究することゝし度い。之、又四季の和名と同様、異説多く、一致しないが、本居宣長は古事記傳に於て『凡て月々の名ども、昔より説どもあれど、皆わろし。其中にたゞ三月を彌生なりと云るのみはよし。』又、『此外にも、己も考出て、さもあらむと思ふ彼此はあれど、十二月みながらは、未だ考得ざれば、今云ず、なほよく考へて云べし』と書いて居る。

たゞ、考ふべきは、我國は、上代より農耕を本としたから、月々の名稱は農事に依つて呼ばれたと解することが至當ではあるが、之が解釋については、可成り附會せられたものがある様である。

次に、諸説を一覽表に作成して、比較に便ならしめることゝした。

終りに、筆者の十二月和名についての解釋を概説することゝしよう。

一月(むつき)は、從來睦む又は親む月の意味に解せられたが、月の和名が農事を元として成つた事に着眼すれば、適當なものでなかつたことが判る。谷川士清も生月と充てゝ居るが、之れは前の年から藏つてあつた種子が一陽來復して芽を生むと云ふ意に解釋することがよいであらう。

二月(きさらぎ)は、陽氣が更にやつて來て、芽を大きくさせ、三月(やよひ)には彌々生ひ繁る。四月(うづき)は植える。五月(さつき)は早苗を田に植える月、六月(みなつき)は水が大切な月、七月(ふみつき)には稻が穂を持つて來る。八月(はつき)に成ると、稻の穂が張出して來る。九月(なかつき)は稻を刈る月である。十月(かみなつき)には收穫を神に供饌する。十一月(しもつき)に爲れば、霜が降りるので、來年の農耕の用意にかゝる。十二月(しはす)には、既に來年の準備も完了して、正月を迎へるのを待つ。大體以上の如き解釋となるのである。(皇紀2600年6月31日朝)

上海で夏季時刻採用

〔同盟上海五月29日發〕 共同租界工部局では、日光節約案として、夏の間、工部局各局部の時計の針を1時間づつ進める事になり、フランス租界工部局および上海特別市政府にも諮つたが、いづれも異議なく賛成したので、五月29日の參事會で正式決定、近く一せいに實施することとなつた。